

トマス・アクィナス
『説教 18「地は芽生えさせよ (*Germinet Terra*)』
におけるマリアの原罪についての理解とその可能性

袴 田 玲

はじめに

本稿は、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, ca.1225–1274) の『説教 18「地は芽生えさせよ (*Germinet Terra*)』: 兄弟トマス・アクィナスの至福なる乙女の誕生についての説教 (*Sermo de Nativitate Beate Virginis fratris Thome de Aquino*)』の考察によって、トマスのマリア論——とくにその原罪についての理解——についての新たな解釈を提示すると同時に、彼の司牧者そして説教者としての側面に光を当てることを目的とする。

今日では聖母マリアの無原罪性——すなわち、マリアが懐胎された瞬間から原罪のすべての汚れを免れていたという理解（無原罪の御宿り）——を教義とするカトリック教会であるが¹⁾、このような理解が教義として定められるまでには歴史上様々な議論があり、カンタベリのアンセルムス、クレルヴォーのベルナルドゥス、ボナヴェントゥラと並んでトマスもまたマリアの無原罪性を否定した一人であった。そして、先行研究の中でマリアの原罪に関するトマスの立場について議論される際には、『神学大全』第3部第27問題を引き合いに、トマスが「乙女マリアの最大の純潔か、万物の全的な救い主キリストの尊厳か」というジ

1) 「人類の救い主キリスト・イエスの功績を考慮して、処女マリアは、全能の神の特別な恩恵と特典によって、その懐胎の瞬間において、原罪のすべての汚れから、前もって保護されていました」1854年12月8日教皇ピウス9世による大勅書 *Ineffabilis Deus*。

レンマから逃れられておらず、それが彼の無原罪の御宿りの否定につながっているという見方が支配的であった²⁾。それに対し、本稿では2014年に刊行されたレオ版全集第44巻第1分冊『説教集 (Sermones)』³⁾の中から『説教 18「地は芽生えさせよ (Germinet Terra)」』を取り上げ、これまでトマスのマリア論に関する研究の俎上に載ることのなかった本テキストの読解によって、トマスのマリア論、とくにその原罪とそこからの聖化を彼がいかに捉えているかという点について、新たな視点から検証してみたい。その中では、『神学大全』でのマリアの原罪に対するトマスの態度をはるかに超えて、彼がマリアの被る原罪に対しその意義を積極的に評価していること、そしてマリアにおける原罪からの聖化を人類全体の聖化のために中心的役割を果たすものとして強調していることが確認されよう。このように、本稿ではトマスの『説教 18「地は芽生えさせよ」』の読解を通じて彼のマリア論を改めて検証し、同時にその東方における神化論の議論への接続の可能性についても示唆を与えることを目指している。また、本稿は、『神学大全』や『対異教徒大全』といった著作を中心に彼の神学的哲学的思索の解明に研究者の関心が集中してきたこれまでのトマス研究に対し、(神学者や哲学者としてのみならず) 司牧者そして説教者としてのトマスの側面に迫らんとする近年の一部の研究潮流⁴⁾に与し、その一助となることを試みるものでもある。

2) 例えば、トマス・アクィナス『神学大全 第32分冊 第3部第27-30問題』(稲垣良典訳、創文社、2007年)内の訳者による解説、p.146参照。以下、『神学大全』からの引用はすべてレオ版全集のテキストに基づき、S.T., III, q.27, a.1, ad1 (『神学大全』第3部第27問題第1項異論解答1)等と表記する。なお、邦訳は創文社から刊行されている全訳、トマス・アクィナス『神学大全』、創文社、1960-2012年に依拠した(本稿での引用部分の翻訳者は稲垣良典(S.T., III, q.27; q.40)および竹島幸一(S.T., II-II, q.188)である)。

3) *Sancti Thomae de Aquino Opera omnia, Tomus XLIV, I, Sermones*, edidit L.J.Bataillon, editionem absolverunt G.Berceville, M.Borgo, I.Costa, A.Oliva, cooperantibus P.Krupa, M.Millais, J.-Ch.de Nadai, Z.Pajda, Roma, Commissio Leonina, Paris, Éd. du Cerf, 2014。以下、『説教集』からの引用はすべてこのレオ版全集のテキストに基づき、S.18, 1.14-22 (『説教 18』, 14-22行目)等と表記する。なお、管見の限り『説教 18』の邦訳はまだ存在しないので、本稿で用いる邦訳はすべて本稿執筆者による試訳に基づく。

4) 代表的なものとして J.-P. Torrell, *Saint Thomas d'Aquin, maître spirituel*, Éd. du Cerf, 2017 を挙げることができよう。日本語で読める文献としては、桑原直己「トマス・アクィナスにおける「説教 praedicatio」の意味について」、『倫理学』20号、筑波大学倫理学研究会編、2004年、pp.35-50、および、山本芳久「愛と霊的再生——説教者としてのトマス・アクィナス」、宮本久雄編著『愛と相生 エロース・アガペー・アモル』、教友社、2018年、pp.172-

1 『説教 18「地は芽生えさせよ (*Germinet Terra*)』』について

「説教者兄弟会 *Ordo Fratrum Praedicatorum*」の正式名称が示す通り、ドミニコ会はその設立当初から説教に重きを置く修道会として存在し、トマスもまた説教の重要性を認めている。

活動生活の活動には二通りある。一つは、観想の充満から発する活動であって、例えば、説教や教授などである。……これは、単なる観想に優る。すなわち、照らすことが光るだけよりも優れているように、同じく、観想したものを他に伝えることは観想するだけよりも優れている⁵⁾。

或る人が説教し、教導することによって（自らが）観想したことを他者に伝えるという意味での活動的生活は、たんに観想的である生活よりもより完全である。なぜなら、このような生活は観想のあふれる豊かさ *abundantia* を前提するものだからである。したがって、キリストはこのような生活を選び給うた⁶⁾。

また、実際にトマスはドミニコ会士およびパリ大学神学部教授として説教を行い、それらは教会で一般信徒を対象とした俗語での説教⁷⁾と大学や修道院で行ったラテン語での説教⁸⁾に分けられる。

今回考察の対象とする『説教 18』は *thema*（当該説教が基づく聖書からの引用句）、*prothema*（当該説教の基本的姿勢を示すとともに神への祈願

198 を参照。

5) *S.T.*, II-II, q.188, a.6, co.

6) *S.T.*, III, q.40, a.1, ad2.

7) ナポリやローマをはじめイタリア各所で俗語での説教を行ったという証言は複数あるものの、現在までに写本の形で伝わっているテキストは発見されていない。一般信徒を対象とした俗語での説教の際には、「議論の緻密さやスコラ学的教育よりも、人々にとっての有用性を優先した」（トッコのギレルムス『トマス評伝』48章）であるとか、「或る聖週間の日、ローマでの説教の最中、主の受難を思い起こさせて聴衆を涙させ、またその復活の喜びに与らせた」（同、53章）などの証言がある通り、トマスが聴衆の前に熱く語りかける場面もあったようである。Cf. Thomas D'Aquin, *Sermones*, Traduction française d'après le texte latin de l'édition Léonine, introduction et commentaire de J.-P.Torrell, Paris, Éd. du Cerf, 2014, pp. 14-17.

8) *sermons universitaires, academic sermons* 等とも呼ばれる。

を述べる導入部)、sermo (説教)、collatio (講話、晩課説教)を備えた形式を有し、このことは同説教がドミニコ会修道院内で行われたことを示唆する⁹⁾。さらに、同説教の前半 sermo 部分ではマリアの誕生について語られる一方で、後半 collatio 部分では十字架称賛について語られ、一連の説教が十字架称賛祝日の始まりに際して行われたことが言明されている。このことは、同説教がマリアの誕生を祝う週間と十字架称賛の祝日が重なる年に行われたことを示す。校訂者 L. J. Bataillon は、この事実にもその他の条件も突き合わせた結果、同説教が行われた年月日を 1271 年 9 月 13 日と推定している¹⁰⁾。比較の対象となる『神学大全』第三部の執筆が 1270 年 (あるいは 72 年) 頃から始まったと推定されている¹¹⁾ことに鑑みると、両者はほぼ同時期の成立とみてよいだろう。また、同説教の文体は、一人称単数形複数形や二人称単数形が頻出し、同僚のドミニコ会士や学生に対する親しい語りかけが特徴的であり、新旧約聖書および東西の教父著作からの多数の引用や豊富な比喩表現も見受けられる。これらの点は、アリストテレスをはじめ非キリスト教的哲学的著作からの引用も多く、三人称による客観的語り口が用いられ、比喩表現の極めて抑制的な『神学大全』等の彼の哲学的著作と明らかな対比をなしている。

その内容を概略すると次のようになる。まず、同説教は「創世記」中の一節「地は芽生えさせよ、青々として種をもたらず草と、実をなす果樹とを」(創 1:11)を *thema* として展開され、マリアの誕生について語られるその前半 sermo 部分では、マリアが「青々として種をもたらず草」に当てはめられ、「草」にマリアの遜りが、「青々しさ」にその乙女性(処女性)が、「種をもたらずこと」にその豊饒性が見いだされ

9) 当時の規定によるとマギステルは学期中の日曜日と祝祭日に説教を行うことになっており、とりわけ托鉢修道会のマギステルには「朝に修道院内で sermo (説教)を行った場合には、晩課の際にもう一度 collatio (講話、晩課説教 collatio in sero とも呼ばれる)を行う」ことが定められていたという。なお、sermo は朝のミサ内で福音朗読の後に語られ、collatio は晩課の祈りの際に朝の sermo の中で語ったことの要約とさらなる敷衍として行われた。Cf. *Ibid.*, pp. 17-19; M.-R. Hoogland, *The Academic Sermons*, Catholic University of America Press, 2010, p. 7.

10) *Sancti Thomae de Aquino Opera omnia, Tomus XLIV, I, Sermones, op.cit.*, p. 276.

11) 『神学大全』、上掲書、第3部第27-30問題の訳者による解説の註 169, p. 158 および同第3部第1-6問題の訳者(山田晶)による解説 p. 441。

る。また、十字架称賛について語られる後半 *collatio* 部分では、まずその冒頭でマリアと十字架（上のキリスト）が人類を罪から救う二つの治療（*duo remedia*）であり、その二つは結び付けられて（*coniunguntur*）考えられるべきであること、さらに、前半 *sermo* 部分でマリアの性質として強調されたのと同様に、十字架のキリストもまた、その十字架上の死に至るまでの「遜り」によって天へと挙げられたのだと述べられる。続いて、十字架（上のキリスト）が「実をなす果樹」に当てはめられ、「樹（木）」に人類の罪からの癒しを、その樹が「果樹（果実をまとった樹）」であることに十字架上のキリストの示す教えを、その樹がなす「実」に十字架がもたらす人類の浄化・聖化・栄化という三種類の実りが見いだされてゆく。本稿では特に、マリアが「青々として種をもたらず草」に当てはめられる前半 *sermo* 部分の内、「草」の特性に重ねられるマリアの遜りについて注目したい。

2 『神学大全』におけるマリアの原罪に関するトマスの基本的な立場 ——『説教 18「地は芽生えさせよ」』との比較の対象として

当時、カトリック教会内部ではマリアの無原罪を主張するフランチェスコ会とそれを認めないドミニコ会の間で激しい論争があり、トマスはマリアの無原罪性を否定した一人であった（現代でも多くのプロテスタント諸派や正教会ではマリアの無原罪性を認めていない）。

ここで、『説教 18』との比較の対象とするため、また、トマスの基本的なマリアにおける原罪についての見解を整理するため、『神学大全』第3部第27問題第1-2項における彼の立場を確認しておきたい。

まず、同書第3部第27問題第1項解答主文において、父の独り子を出産したマリアが「他のすべての者にまさってより大いなる恩寵の特別の賜物 *privilegium* を授けられたと信じる」こと、また、マリアが「その母の胎から生まれる前に聖化されていた *sanctificata fuerit* と信じる」ことは、「理にかなったこと *rationabiliter* である¹²⁾」と明言される。さらに、つづく異論解答の中では、マリアがまず先に肉において受胎され、

12) *S.T.*, III, q.27, a.1, co.

その後で霊において聖化されたという点が確認された¹³⁾上で、次のように述べられる。

原罪 *peccatum originale* は、起源 *origo* を通じて人間本性——原罪は本来的にそれに関わっている——が伝達・共有されるかぎりにおいて、起源からしてとりついてくるのである。ところで、このことが起るのは母胎にやどった子供に理性的靈魂が注入される *animatur* ときである。したがって、理性的靈魂の注入 *animatio* の後においては、母胎にやどった子供が聖化されることに何の妨げもない。というのは、その後は母胎のうちに人間本性を受けとるためではなく、すでに受けている人間本性の何らかの完成のためにとどまっているからである¹⁴⁾。

以上の諸点を前提として、つづく第2項においてトマスはマリアの原罪およびそこから聖化について決定的な見解を述べるに至る。

至福なる乙女の聖化は、二つの根拠からして、彼女の靈魂注入以前 *ante ejus animationem* のこととしては理解できない。すなわち、第一に、ここで語られている聖化 *sanctificatio* とは原罪からの潔め *emundatio* に他ならないからである。……罪過は恩寵によつての他は潔められえないのであるが、恩寵の基体は理性的な被造物のみである。したがって、理性的靈魂の注入以前に *ante infusionem animae rationalis* 至福なる乙女が聖化されることはなかったのである。

第二に、理性的被造物のみが罪過を受け取りうるものであるから、理性的靈魂の注入以前は、母胎にやどった子供は罪過にとりつかれることはないからである。したがって、至福なる乙女がいかなる仕方であれ、靈魂注入以前に聖化されていたならば、彼女は原罪の汚れを被ることは決してなかったであろう。そういうわけで、……キリストを通じての贖いと救いを必要とすることはなかったで

13) *S.T.*, III, q.27, a.1, ad1.

14) *S.T.*, III, q.27, a.1, ad4.

あろう。しかし、キリストが「すべての人の救い主」ではない、ということは条理に合わぬ *inconveniens* ことである。ここからして、至福なる乙女の聖化は彼女の霊魂注入の後 *post ejus animationem* であった、と結論せざるをえない¹⁵⁾。

もし至福なる乙女の霊魂がけっして原罪の汚れにとりつかれることはなかったのであれば、このことは万物の全的な救い主 *universalis omnium Salvator* としてのキリストの尊厳を毀損することになったであろう。このようなわけで、全的な救い主であるかぎり、救われることを必要としなかったキリストの下では、至福なる乙女の純潔性は最大であった。というのも、キリストはいかなる仕方においても原罪にとりつかれることなく、その懐胎そのものにおいて聖なる者であったからである。……しかし、至福なる乙女はたしかに原罪の汚れを被りはしたが、母の胎から生まれる前にそれから潔められた¹⁶⁾。

たとえ至福なる乙女の両親が原罪の汚れから潔められていたとしても、それにも拘らず至福なる乙女は原罪の汚れを被ったのである。なぜならば、彼女は肉の欲情にもとづいて、男と女の交わりからしてはらまれたからである。というのは、アウグスティヌスは『結婚と欲情について』において「肉の交わりから生まれるものはすべて罪の肉である」と述べているからである¹⁷⁾。

上記引用によって『神学大全』第3部第27問題第1-2項から確認できるトマスの立場とは、「マリアもまた原罪の汚れを被ったが、母の胎から生まれる前に聖化された」というものであり、その根拠を以下のように列挙できるだろう。

- ・原罪は、人間本性が伝達共有されるかぎり、起源からしてとりつい

15) *S.T.*, III, q.27, a.2, co.

16) *S.T.*, III, q.27, a.2, ad2.

17) *S.T.*, III, q.27, a.2, ad4.

ており、人間の夫婦の性交によってはられるものはすべて原罪を被る。

- ・原罪の伝達共有は靈魂の注入の際に起こる。
- ・靈魂の注入とは、母胎に宿った子供が理性的被造物となり、罪過および恩寵の基体となることである。
- ・聖化 sanctificatio とは原罪からの潔め emundatio であり、それは恩寵によってのみ可能となる。

→以上より、聖化は靈魂の注入後、原罪の伝達共有後にしか成立しないということになる。また、

- ・マリアが原罪を被らないということは万物の全的な救い主としてのキリストの尊厳を毀損する。
- ・マリアの最大の純潔性はキリスト（原罪を被らない存在、全的な救い主、その懐胎そのものにおいて聖なる者）の下である。

このような『神学大全』におけるトマスの議論に対し、稲垣は（ドゥンス・スコトゥスの主張したように）「聖化は、すでに被った原罪の汚れを潔めるという仕方だけでなく、原罪にとりつかれぬように保全するという仕方でも為される」ことを指摘し、トマスが「原罪からの潔めは、すでに或る者が自らに（起源という仕方）で被っている原罪からの潔めであるとの前提を受けいれているところ」に「問題がある」があると論難¹⁸⁾、トマスが「人類全体の救い主イエス・キリストの受難の功

18) 「ここでトマスが『理性的靈魂の注入以前』には聖化、すなわち原罪からの潔めはありえない、と論じているのは正しいが、そのさい原罪からの潔めは、すでに或る者が自らに（起源という仕方）で被っている原罪からの潔めであるとの前提を受けいれているところに問題がある。なぜなら、この前提を認める限り、原罪からの潔めは理性的靈魂が注入された後でなければならないから、理性的靈魂の注入の後、潔めが行われるまでの、原罪の下にある期間を措定しなければならないからである。しかし、聖化は、すでに被った原罪の汚れを潔めるという仕方だけでなく、原罪にとりつかれぬように保全するという仕方でも為されるのであり、その場合にはここでのトマスの議論は成立しない」。

「ここでのトマスの議論は、その前提に問題があり、結論も受けいれることのできないものであるが、彼の議論を支えている基本的原理が『キリストがすべての人間の救い主である』という信仰であることを見落としてはならないであろう」『神学大全』、上掲書、第3部第27問題の訳者註 57 および 60, p. 85。

徳のちからによって聖母マリアは原罪の汚れからまったく免れることができた、という可能性を議論にとりいれることはなかった」点をトマスの限界と見ている¹⁹⁾。

彼〔トマス〕はなぜマリアには恩寵によってただ一つの小罪も犯さなかったという最大の純潔が与えられたことを肯定しながら、原罪の汚れから完全に守られていたことを肯定できなかったのであろうか。

それはただ一つ、乙女マリアが人類のすべての成員と同じく、救い主キリストによって原罪から解放され、贖われたことを肯定するのでなければ万物の全的な救いとしてのキリストの尊厳を毀損することになる、という理由によるものであった。言いかえると、乙女マリアが原罪の汚れを完全に免れていたことの肯定は、すべての救いと贖いはキリストの恩寵によるという信仰を危うくするものと受けとられたのである。

では、乙女マリアの最大の純潔か、万物の全的な救い主キリストの尊厳か、というジレンマを逃れる可能性はなかったのか。実は、トマスの頭には浮ぶことのなかったその可能性を発見したのがドゥンス・スコトゥスであった²⁰⁾。

このように、『神学大全』を解説する限りでは、マリアの被る原罪は男女の性交によって生まれてくる人間本性に必然的に付随し、キリストの万物の全的な救い主であることを毀損しないために要請される、いわばやむをえぬもの（必要悪）としてしか評価されえず、実際に研究者たちもトマスにおけるマリアの無原罪性の否定をそのようにしか捉えてこなかった。しかし、果たしてトマスはマリアが原罪を被ることに必要悪

19) 「トマスはこのように、聖母マリアが、救い主キリストのように原罪の汚れからまったく免れていたことは否定するが、救い主キリストの尊厳性を傷つけない仕方彼女の純潔を最大のものとするを試みている。ただ、トマスは、人類全体の救い主イエス・キリストの受難の功德のちからによって聖母マリアは原罪の汚れからまったく免れることができた、という可能性を議論にとりいれることはなかったのである。『神学大全』、上掲書、第3部第27問題の訳者註 69, pp. 85-86.

20) 『神学大全』、上掲書、第3部第27問題の訳者による解説、p. 146.

としての価値しか見いだしていないのだろうか。そして、トマスは稲垣の言うように「人類全体の救い主イエス・キリストの受難の功德のちからによって聖母マリアは原罪の汚れからまったく免れることができた、という可能性」を単純に思いつくことができなかったのだろうか。

このような疑問に対し、以下では『説教 18「地は芽生えさせよ」』の分析によって、トマスがマリアの被る原罪に極めて重要な意義を見いだしているということを示してみたい。

3 『説教 18「地は芽生えさせよ (Germinet Terra)」』における トマスのマリア論の分析

ここでとくに取り上げたいのは、トマスが「草」の特性に見いだすところのマリアの遜りについてである。

ここでまず、トマスはマリアが譬えられるところの草の特性として、丈の低さ、柔らかさ、薬効という三つの特性を識別する (S.18, 1.26-28)。

第一に、草の丈の低さとは、高木のそびえたつ高さに喩えられる人類の傲慢さに対する、マリアの小ささ、すなわち遜りである。傲慢さは「不信心の源」(S.18, 1.35-36)、「すべての罪の始まり」(S.18, 1.66)とされ、「人類は傲慢さによって失われていました」(S.18, 1.65-66)と言われる通りアダムとエバの原初の逸脱を示唆するものである。それに対し、高さ＝傲慢さと対極をなすマリアの小ささ＝遜りによって人類の原初の罪は治療されるのである。

彼女は遜りによってのみ栄光を授けられたのです。「主は彼のはし
ための遜りに目を留めてくださった」〔ルカ 1:48〕と言われてい
ます。その女性 (mulier) によって (per quam) 人類を救い、反
対のものが反対のものによって治療される (contraria contrariis
curentur) ような、そのような女性を主は探されたのです。人類は
傲慢さによって失われていました。「傲慢さがすべての罪の始まり
である」〔シラ 10:15〕とあるように。それゆえ、〔その〕遜りに
よって人類を救うことになっている遜られる御子が傲慢な母の中に
宿るのはふさわしくなかったのです。それゆえ、神は遜りにしか目

を留められなかったのです²¹⁾。

もちろん、人類の罪を癒し、人類を救う第一の主体はイエスでありその遜りであるわけだが、ここではマリアにも救済の働きにおける独自の主体性、すなわち遜りという主体性が認められる。その結果、「(主は)その女性によって人類を救う」とまで明言される。また、ここにある「反対のものが反対のものによって治療される (contraria contrariis curentur)」という表現は、それ自体はヒポクラテスらの古代医療に淵源する広く受け入れられてきた一つの格言であるが、ここではエバ(とアダム)によって生じた人類の罪が第二のエバであるところのマリアの遜りによって癒されるとのトマスの考えを示している。

これと同様の理解は、草の第二の特性として「柔らかさ」すなわち聴従 (obedientia) が取り上げられる次の段落からも読み取ることができる。トマスはここで聴従を「格別(第一)の徳」(S.18, 1.112)とし、マリアの聴従を称揚した直後、

「一人の不聴従によって」[ロマ 5:19] 私たちは皆罪人となりました。それゆえ、私たちが聴従によって救われるということは相応しいことだったので²²⁾。

と述べる。もちろんこれは「一人の不聴従によって多くの人が罪人とされたように、一人の聴従によって多くの人が正しい者とされるのです」(ロマ 5:19) という新約聖書中のパウロの言葉を下敷きにした発言であるが、パウロの文脈ではアダムとキリストの対応関係だったのに対し、ここでは(おそらくはエバと)マリア(の対応関係)に置き換わっていることに留意する必要がある。トマスはここでアダム＝キリスト論による救済とはまた異なった、女性性に着目したエバ＝マリア論による救済を説こうとしているようにも見える。(ただし、先に見た通り、十字架称賛について語られる本説教の後半 collatio 部分冒頭で、マリアと十字架上のキリストが人類を罪から救う二つの治療であり、その二つは結び付けられて考

21) S.18, 1.61-70.

22) S.18, 1.124-127.

えられるべきであること、また、マリア同様にキリストもその十字架上の死に至るまでの「遜り」によって天へと挙げられたのだと述べられていることから、イエス・キリストのわざなくして人類の救済は不可能であり、それはイエスとマリアのいわば「協働的遜り」が実現した結果であると言えるだろう。）

このことを強く裏付けるのが、つづく段落における、マリアすなわち草の第三の特性として薬効すなわち罪の癒しと人類の救いについて語られる場面である。草には癒す力があり、病気の治療に用いられるという一般論が確認された (*S.I.8*, 1.129–130) 後、以下のように述べられる(極めて重要な箇所であると思われるので、長くなるが引用する)。

人類は病気にかかっていました。詩編作者が「憐れんでください、主よ。私は病気にかかっています、癒してください」と〔訴える〕ように。〔この〕病気とは罪の結果であり、神は薬による治療を施すことを望まれました。そして神は良い医師を真似てそれを為しました。良い医師たちが彼らの治療〔の効力〕を示したいときには、まず重篤な病気に従事し (*ponunt se ad graues infirmitates*)、かくして名声を得ます。〔ところで、〕全人類が病を患っていましたが、女性においてはほぼ完全に腐っているようでした (*uidebatur quasi totum corruptum*)。ソロモンが「私は女性が死よりも苦いことを見いだした」〔コヘ 7:26〕と言ったように。それゆえ、主は自らの治療が有効であることを示すことを望んで、それを最初に一人の女性において示し、そうすることでその女性を通じて他の人へも〔治療の効果が〕波及するようにされたのです。「集会の書」の中で「すべての人の治療〔癒し〕は雲の急速な動きの中にある」〔cf. シラ 43:24〕と言われているように²³⁾。

ソロモンがその祈りの中で「主は、雲の中に住まう、と仰せになった」〔王上 8:12〕と言ったように。この雲の中に、すなわち、至福なる乙女の中に、人類の救いがあるのです。なぜなら、彼女を通

23) *S.I.8*, 1.133–145.

じて人類は癒されるからです²⁴⁾。

すべての人のための薬がこの雲の中に、すなわち至福なる乙女の中にある²⁵⁾。

「雲の急速な動き」と〔シラが〕言っているのは、この薬の効力が迅速に現れるからです。幼少期に恵みをいただくことは〔薬効の現れが〕速いということですが、至福なる乙女は母の胎の中で〔すでにこの〕恵みをいただいたのです。なぜなら、その〔原罪〕中で受胎されたといえども (licet concepta fuerit in ea), 〔母の〕胎の中で彼女は原罪から聖化された (sanctificata est) のですから²⁶⁾。

神は、罪の結果である病を最も重く患っている一人の女性をあえて選り、その女性の治癒によって自らの力の大きさを示すだけでなく、その女性から他の人間へも治療の効果が波及することを欲したのだとトマスは語る。ここではマリアも原罪からは免れてはいない。むしろ、原罪の結果を最も重く患う存在である女性の代表として描かれ、そのような存在までもが救われ、聖化されるということによって、救いの力の大きさ、完全性が謳われる。全的な救済のためにはマリアも原罪を被っていないなければならないのである。

さらに、ここではかつて患者であったマリアが癒され (= 聖化され)、今や人々の癒しにとってキリストと共に中心的働きをするものとして描き出されている。もちろん、治療を施す主体 (= 医師) は神であり、マリアも当初最も重篤な患者として治療される側にいた。マリア自身、まだ母の胎内にいるうちに薬という恵みを施されたと述べられる²⁷⁾。しか

24) S. 18, l. 148-150.

25) S. 18, l. 152-153.

26) S. 18, l. 156-161.

27) また、マリア自身を薬草として讃える文脈とはいえ、「乙女の中に人類の救いがある」「すべての人のための薬がこの雲の中に、すなわち至福なる乙女の中にある」というトマスの表現には、人類にとっての薬であるキリストを胎内に宿すマリアというイメージも当然重ねられているであろう。しかし、その場合でも、マリアは単に薬を物理的に中に容れるにすぎない薬袋としてイメージされているのではなく、自らもまた薬となり薬効を持って人々の救済のためにキリストと共に中心的働きをなすものとして捉えられている。

し、すでに母胎にある内に原罪から潔められ、さらに自らの徹底した遜り・聴従によって、マリアは薬草として人々を癒す側に回るのである（ワクチンが病原体から作られるように、マリアもまた病に陥っていなければ薬にもなれなかったと言えるかもしれない²⁸⁾）。徹底した遜りの受動性は癒しの能動性に転化するのである。

む す び

以上行ってきた考察から現段階までに導かれる『説教 18』におけるトマスのマリア理解は以下のようにまとめられるだろう。

まず、マリアの原罪についての基本的態度は比較の対象となった『神学大全』におけるそれと共通し、「マリアもまた原罪の汚れを被ったが、母の胎から生まれる前に聖化された」というトマスの理解を示すものである。

しかし、『神学大全』を解説する限りにおいてはマリアの被る原罪は男女の性交によって生まれてくる人間本性に必然的に付随し、キリストの万物の全的な救い主であることを毀損しないために要請される、いわばやむをえぬもの（必要悪）としてしか浮かび上がってこなかったのに対し、『説教 18』ではマリアが原罪を被ることの意義が新たな側面から極めて積極的に捉えられているということが明らかになった。すなわち、マリアは他の人間と同じく原罪を被る一人の人間（むしろ、原罪の結果を最も重く思う存在である女性の代表）として描かれており、患者としてその重い罪の病から癒されると同時に、自らその遜りと聴従によって薬草となり、全人類の救済にとってイエスと共に中心的働きをなすということである。共に徹底的な遜りの人として、第二のアダムとエバとして、キリストとマリアは人類の救済のために協働するのである。このことは、『神学大全』におけるマリアの聖化が基本的には個人的な聖化として描かれているのに対し、『説教 18』では全人類の聖化に先駆け、全人類に波及するものとしてのマリアの聖化が強調されていることによく表れている。このことはさらに、原罪を負わないようなある意味で

28) 薬（草）やワクチンは医師によって用いられる手段でしかないという見方もあるだろうが、それでもやはり薬そのものに癒しの力があること自体は否定できないだろう。むしろここでも医師と薬の協動的癒しがイメージされるべきであろう。

「人間離れ」した者が聖化されても、原罪を負う他の全ての人間の聖化にとってどのような意味を持ちうるのか、というトマス自身の疑問の表明とも捉えることができ、他方、説教を聞く聴衆（おそらくは親しい同僚や若輩のドミニコ会士たち）にマリアと同じく遜りと聴従による聖化への道行きを歩むよう鼓舞するトマスの司牧的配慮の現れであるようにも思われる。『説教 18』において、もはや「マリアの最大の純潔」の問題は前面に出てきていない。それは「マリアの最大の遜りと聴従」によって捉えなおされていると言ってもいいだろう。マリアが原罪を被ったことをマリアの最大の遜りによる「自発的な引き受け」とトマスが捉えていると理解することは行き過ぎた解釈かもしれないが、しかしマリアによる原罪の被りが極めて肯定的積極的に描き出されていることは確かである。

このように、本稿で示してきたトマスにおけるマリアの原罪、および、人々の聖化の道行きにおけるマリアの中心的役割についての理解は、東方キリスト教中世の代表的思想家グレゴリオス・パラマス（ca. 1296-1357/59）におけるマリア理解とも多くの共通点をもつ。マリアもまた原罪から免れておらず、その意味で一人の人間であること、しかし、幼少期にその原罪から潔められて神化されたマリアが、今この瞬間にも天からキリストと共に神化の恵みを地上に注いで人々の神化への道行きを鼓舞していることなどは、パラマスがやはり街の信徒や修道士に対する説教の中で強調した点である²⁹⁾。詳細な議論は別の機会に譲るとして、ここでは、キリストと共に天と地を仲介するマリアが、中世における東西のキリスト教会をも橋渡しする存在として重要な意味を持つことを示唆するにとどめ、本稿のひとまずの結びとしたい。

29) 拙稿 Rei Hakamada, Gregory Palamas' Interpretation of the Dormition of the Mother of God, Ed. By Jean H. Miyamoto, *Contribution of Women to Con-viviality : In/Ad Spiration to Convivials*, Kyōyūsha, 2019, pp. 70-84 を参照されたい。